2026年11月　第66号

一般社団法人 日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会第36回学術集会開催を終えて（開催報告）

学術集会長　山下 早苗
（静岡県立大学看護学部・看護学研究科
学部長　小児看護学教授）

日本小児看護学会第36回学術集会を、2026年7月4日（土）・5日（日）に、徳川家康公ゆかりの駿府の地・静岡市において開催いたしました。共催の静岡県立こども病院看護部とともに、「こどもの力を育むチームのHarmony」をメインテーマに掲げて準備を進めました。未来への創造や希望、そして学びの愉しみを感じていただける場の提供を目指し、会期当日は想定を上回る盛況となり、全国各地から多数の皆様にご参加いただきました。ここに無事に会期を終了できましたことへの深い感謝を込めまして、本学術集会の概要、運営実績、そして皆様からいただいた貴重なご意見についてご報告申し上げます。

参加状況について

本学術集会の総参加者数は、計1,679名（内訳：会員948名、非会員671名、学生34名、ご招待26名）でした。医療・福祉・教育関係者、さらには学生や研究者など、多様なバックグラウンドを持つ参加者が一堂に会し、専門分野の垣根を越えたつながりを感じさせる2日間になりました。

プログラム構成と企画について

メインテーマを多角的に掘り下げるべく基調講演には看護倫理学の第一人者である小西恵美子先生をお迎えして「看護職の徳と組織のハーモニー」についてご講演をいただきました。また特別講演では、歴史学者の小和田哲男先生より、家康公のリーダーシップから学ぶ持続可能性についてご示唆をいただきました。さらに、HPS（ホスピタル・プレイ・スペシャリスト）養成を担う静岡県立大学短期大学部教授の松平千佳先生による「こどもの遊びの世界」や、地震学者で著名な尾池和夫先生による「南海トラフ巨大地震への備え」など、静岡県ならではの知見に触れる教育講演を開催しました。シンポジウムでは、「遺伝医療」や「こどもの貧困」を取り上げ、社会的弱者支援の視点から議論を深めました。さらに特別企画として、国内初の導入から歴史を重ね、現在は3代目の「タイ」が活躍する静岡県立こども病院のファシリティドッグを取り上げ、多職種連携の実際をご紹介しました。

年に一度の学術集会は、学びと交流、そして新たなネットワークを築く貴重な場です。今回、190題に及ぶ演題と40題近いテーマセッションのご応募をいただきました。皆様の情熱にお応えすべく、公正な査読を経て採択された演題の発表とテーマセッションの討論の場と時間を、最大限に確保しました。

また、学術的なプログラムのみならず、「ウエルカム企画」として開会式では「Harmony」を体現する静岡県立大学吹奏楽部による演奏会を催しました。その他、静岡ならではの「呈茶」や、日頃の疲れを癒やす「マッサージ」、「こどもたちによるレモネードスタンド」など、参加者の五感を刺激し、和やかなコミュニケーションを生む企画を多数実施いたしました。さらに、学術集会前日には「静岡県立こども病院見学ツアー」も企画・実施し、実際の医療現場や取り組みを肌で感じられる貴重な機会として、大変好評を得ました。

参加者アンケートから見えた成果と今後の課題

【評価された点】多くの参加者から寄せられたのは、プログラム内容全般への高い満足度でした。「日々の臨床や教育現場に直結する内容であった」「明日からの実践に役立つヒントを多く得られた」といった声が聞かれました。また、ウエルカム企画や、学生をはじめとする実行委員・ボランティアスタッフの対応、ホスピタリティに対しても、数多くの温かい感謝の言葉をいただきました。会場へのアクセスの良さや、混雑の少なかった快適なトイレ環境などハード面についても高く評価されました。

【主な改善点・今後の課題】メインプログラムに関しては会期後にオンデマンド配信を行ったものの、テーマセッションと演題発表においては、同時間帯に関心の高い人気セッションが重なってしまい、希望していた演題を聴講できなかったという声や、一部の会場において立ち見や入場制限が生じたことに対する改善要望が寄せられました。その他にも、演題査読の質、テーマセッションの総数の多さ、演題応募条件（入会手続きや年会費の扱い）など、運営に関する具体的なご意見やご提言が寄せられました。

おわりに

日本小児看護学会第36回学術集会は、企画委員・実行委員の皆様、関係諸機関、そして何より全国からご参加いただいた多くの皆様の温かいご支援とご協力により、大盛況のうちに幕を閉じることができました。「こどもの力を育むチームのHarmony」という共鳴は、参加者一人ひとりの日々の実践や現場へと持ち帰られ、未来を担うこどもたちの健やかな育ちを支える大きな力となりますことを心より願っております。また、浮き彫りとなった課題は第37回学術集会へ引き継ぎ、更なる発展へと繋げてまいります。最後に、本学術集会にご尽力いただいたすべての皆様に、心より厚く御礼申し上げます。



名誉会員表彰

このたび、筒井真優美先生が本学会の名誉会員となられました。

筒井先生は、長年にわたり本学会の発展に多大なるご尽力をいただくとともに、看護学の発展と後進の育成に大きく貢献されてきました。

7月4日に開催された会員集会において、江本リナ理事長より名誉会員証が授与されました。

筒井先生のこれまでのご功績に心より敬意を表するとともに、今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。



名誉会員証授与の様子
（左：江本 リナ 理事長、右：筒井 真優美 様）

成人移行期支援講演会の報告（診療報酬検討委員会・教育委員会合同開催）

成人移行期支援入門 ―小児から成人医療へのスムーズな架け橋を目指して―

診療報酬検討委員会　委員長　萩原　綾子

診療報酬検討委員会では、成人移行期支援体制の評価について、日本小児科学会等と合同で要望を行ってきました。中央社会保険医療協議会において、令和8年度診療報酬改定での評価が予定されるなど、成人移行期支援を取り巻く環境は大きく動き始めています。

こうした動きを見据え、令和7年度には、成人移行期支援について幅広い医療・支援職の皆さまに知っていただくことを目的として、講演会「成人移行期支援入門―小児から成人医療へのスムーズな架け橋を目指して―」を開催しました。本講演会は、診療報酬検討委員会が主催し、教育委員会との共同開催という形で実施しました。

講演会は2026年2月21日（土）に、Zoomによる Web形式で開催しました。当日は260名の方にご参加いただきましたが、参加申し込みは441名にのぼりました。会員195名（44％）に対し、非会員の申し込みがそれを上回り、成人移行期支援への関心が学会内にとどまらず、広く医療・支援の現場に広がっていることがうかがえました。

申し込み者の職種では、看護師・保健師・助産師が325名（74％）と最も多く、大学等の教員が71名（16％）、医師17名（4％）、ソーシャルワーカー9名（2％）でした。そのほかにも、相談支援専門員、医療的ケア児等コーディネーター、作業療法士、事務職員など、さまざまな職種からご参加いただきました。所属も、地域支援病院等107名（24％）、大学病院88名（20％）、小児専門病院66名（15％）をはじめ、訪問看護ステーション、行政機関、移行期医療支援センターなど多岐にわたりました。北海道から沖縄まで全国から申し込みがあり、成人移行期支援がさまざまな地域・領域に共通する課題となっていることを実感する機会となりました。

講演では、まず成人移行期支援の基礎知識について紹介した後、看護師、小児医療側の医師、成人医療側の医師、それぞれの立場から取り組みについてお話しいただきました。講師は、診療報酬検討委員会から萩原綾子委員長、水野芳子委員、神奈川県立こども医療センターの柳貞光医師、北里大学医学部循環器内科学の小板橋俊美医師が務めました。

それぞれ30分の講演に続いて、5～6名程度のグループに分かれ、40分間の意見交換を行いました。小児医療から成人医療への移行は、単に「診療科を変える」ことではなく、患者さんが成長し、自分自身の健康や生活を主体的に考えていく過程を支える取り組みでもあります。そのためには、医師や看護師だけでなく、さまざまな専門職がそれぞれの立場から関わり、互いの役割を理解しながら支援していくことが重要です。

今回の講演会には、多様な職種・施設から非常に多くの方にご参加いただきました。講演を聞くだけでなく、日頃の実践や悩みを共有する時間を設けたことで、「自分の施設ではどうだろう」「まず何から始められるだろう」と、それぞれの現場で成人移行期支援を考えるきっかけにもなったのではないかと思います。

令和8年度の診療報酬改定を契機に、成人移行期支援は今後さらに具体的な取り組みが求められる段階に入ります。今回の講演会を第一歩として、今後も看護師をはじめとする支援者が成人移行期支援について学び、実践につなげていける機会をつくっていきたいと考えています。

倫理委員会　テーマセッション報告

モラルディストレス、経験していませんか？
～みんなで苦悩を語り合い、明日からの倫理的実践への支えとする～

● 倫理委員会委員長　平田 美佳

「こどもの気持ちをもっと大切にしたい」「本当は、もう少し時間をかけてこどもの話が聴きたい」「この抑制は、本当に必要なのだろうか」…。小児看護の現場で、このような“もやもや”を感じたことはありませんか。

倫理委員会では、2025年度に病気や障がいをもつこどもの生活と権利を守る臨床実践について全国調査を行いました。その自由記述には、「安全のための必要以上の制限」「親の意向が優先される」「経営・管理上の利点が重視される」「規則や慣習を超えた対応ができない」など、こどものためによりよい看護をしたいと思いながらも、それを実践できない看護師の“嘆き”ともいえる声が数多く寄せられました。

そこで、第36回日本小児看護学会学術集会では、「モラルディストレス、経験していませんか？～みんなで苦悩を語り合い、明日からの倫理的実践への支えとする～」と題したテーマセッションを企画しました。当日は約96名の方にご参加いただき、会場いっぱいに14のグループができました。

第1部では、佛教大学の精神看護専門看護師の白柿綾先生に、「モラルディストレス」と「モラルレジリエンス」についてご講義いただきました。モラルディストレスとは、「何をすることが倫理的に望ましいのか」がわかっていても、さまざまな制約によってそれを実践できないときに生じる苦痛です。一方、そのような苦悩に直面しながらも、自分の倫理観を保ち、経験に意味を見いだし、専門職として歩み続ける力が「モラルレジリエンス」です。

さらに、看護は「感情労働」であり、こどもや家族の苦しみに寄り添い、懸命にケアしようとするからこそ、看護師自身も疲弊することがあること、その一つとして「共感疲労」についても教えていただきました。モラルディストレスと共感疲労は生じる背景こそ異なりますが、どちらも「ケアする人が傷つく」ことにつながります。だからこそ、「どうするべきだったか」だけではなく、「自分は何を感じているのか」に目を向け、その思いを仲間と語り、つながることの大切さを学びました。講義後のアンケートには、「腑に落ちることがたくさんあった」「モラルディストレスばかりの日常に気づいた」「日頃のもやもやを吐き出せる場は大切」といった声が寄せられました。

第2部では、小児看護専門看護師がファシリテーターとなり、少人数のグループで日頃の“もやもや”を自由に語り合いました。話題になったのは、こどものペースを大切にしたい気持ちと忙しい業務との葛藤、採血や処置時の抑制、親の希望とこどもの思いの間での迷い、こどもの死や重症例にかかわる看護師自身のつらさ、人員不足や業務過多、多職種間の認識の違いなどでした。そこには、個人の努力だけでは解決できない、組織やチームの課題も多く含まれていました。けれども、グループワークが進むにつれ、会場のあちらこちらでうなずきや笑顔が見られるようになりました。「自分だけではなかった」「こんな感情をもってもよかったんだ」「話を聞いてもらえて安心した」。そして、「皆がモラルディストレスを感じていること自体が自分にとっての力になる」という言葉も聞かれました。アンケートでも、「皆さんと話すことで気持ちが少し軽くなった」「もう少し時間があればよかったと思うほど、話が尽きなかった」といった感想が寄せられました。

今回のセッションを通して改めて感じたのは、“もやもや”をなくすことだけが大切なのではない、ということです。「これでよいのだろうか」と立ち止まれることは、こどもの権利を守ろうとする私たちの倫理的感受性の表れでもあります。ただし、その思いを一人で抱え続けることは、とても苦しいことです。だからこそ、日々の小さな違和感を言葉にし、「私はこう感じた」と安心して話せる場をつくること、そして、互いの思いを聴き、「私だけではなかった」と感じられること、それ自体が、明日もこどものそばに立ち続けるための力になるのかもしれません。

倫理委員会では、これからも、皆さんが日々の実践の中で感じている“もやもや”を大切にしながら、こどもの権利を守る看護について、ともに考え、語り合える場をつくっていきたいと思います。



国際交流委員会　テーマセッション報告

外国につながる子どもと家族への対応　― 伝わる説明と対話の工夫 ―

● 国際交流委員会委員長　富岡 晶子

外国につながる子どもとその家族への支援では、日常的に「ことばが通じない」「説明しても、理解されているか分からない」といった場面に直面することがあります。とくに小児看護や母子保健の現場では、保護者とのコミュニケーションが、受診行動や子どもの健康状態の把握に直結しその質は医療安全にも大きく影響します。

国際交流委員会では、外国につながる子どもとその家族に対して、安心・安全で質の高い医療を提供することを目指し、これまでも活動を進めてまいりました。第36回学術集会では、「外国につながる子どもと家族への対応－伝わる説明と対話の工夫－」をテーマにセッションを企画しました。話題提供者には、医療翻訳や外国人とのコミュニケーションに関する教育・実践活動に加え、母子保健の現場でも豊富な経験をお持ちの、株式会社ことのはラーニング代表取締役・西村多寿子先生をお迎えしました。

セッションでは、まず、日本国籍を持たない子どもが出生後に在留資格を取得するための手続きが適切に行われていなかった事例が紹介されました。この事例を通して、小児看護や母子保健に関わる専門職には、外国人家族が日本で生活するために必要な制度について基本的な知識を持ち、必要に応じて適切な相談窓口につなぐ役割があることを共有しました。

続いて、「やさしい日本語」を、医療者が身につけるべきコミュニケーションスキルの一つとして取り上げ、その基本的な考え方と活用方法について解説していただきました。翻訳ツールを使用する際には、日本語では省略されることの多い主語を明示しなければ、意図した内容が正しく伝わらない可能性があります。また、説明文書にルビを振るだけでは、制度上の用語や内容を十分に理解できず、必要な行動につながらない場合もあります。このような具体的な課題を踏まえ、「いつ」「どこで」「だれが」「何をするのか」を分かりやすく伝えること、さらに、相手の表情や反応から理解度を確かめることなど、情報提供の工夫について解説していただきました。

後半は、「やさしい日本語3文トレーニング」アプリを用いた実践演習を行いました。医療現場で日常的に使う言葉を短い3文に言い換え、AIによるフィードバックを受けることで、「やさしい日本語」を実際の業務に活かすためのスキルを体験的に学ぶことができました。

本セッションを通して、外国につながる子どもと家族へのコミュニケーション支援は、単なる翻訳や言語上の配慮にとどまらず、医療安全につながる重要な取り組みであることを共有しました。また、「やさしい日本語」は、相手に必要な情報を確実に伝え、適切な行動につなげるために、日常の医療現場で活用できる実践的なスキルであることを学びました。

当日のセッションには、約80名の方にご参加いただきました。終了後のアンケートでは、53名から回答いただき、「外国籍の子どもと家族と接する機会が増える中で、言葉の壁や文化の違いによるコミュニケーションの難しさを感じており、より円滑で伝わりやすい説明方法を学びたいと思った」という参加動機が寄せられました。また、患者対応だけでなく、学生教育や多文化子育て支援など、日頃の活動に活かすことを目的に参加したという回答もありました。参加者からは、「やさしい日本語」や、相手の理解度に合わせた伝え方について新たな気づきを得たという声のほか、翻訳ツールの活用や逆翻訳の重要性について理解が深まったという感想も寄せられました。さらに、「講義や演習を通して、すぐに実践できる学びが得られた」「学生教育にも取り入れたい」といった声もあり、今回のセッションが、それぞれの現場での実践につながる学びの機会となったことがうかがえました。

本テーマセッションは、外国につながる子どもと家族への支援における「伝わるコミュニケーション」の重要性と、それを日常の実践に位置づけていく意義を改めて確認する機会となりました。本委員会では、今後も国際的・文化的な課題を取り上げ、会員の皆様とともに学び、実践につなげていく機会を検討してまいります。



災害対策委員会企画　テーマセッション報告

南海トラフ地震に備える！災害時に誰も取り残さないために看護ができること
― 医療的ケア児とその家族を災害時に支えるための仕組みをつなぐ ―

● 災害対策委員会委員長　今野 美紀

災害対策委員会では、学術集会の開催地特性を踏まえ、災害時の子どもと家族への支援を考えるテーマセッション（以下、TS）の企画・運営を行っています。本学会第36回学術集会では、「医療的ケア児と家族が直面する災害時の現実（訪問看護師・小篠悦子氏）」「現在の防災減災の現状と課題、仕組みの活用や多職種連携（医師・常石秀市氏）」「災害に強い支援体制の構築（小児診療看護師・小泉恵子氏）」の3つの話題提供後、グループワーク（以下、GW）を行いました。本TSには約120名、その後のGWには約半数が参加しました。

8グループで実施したGWでは、現存する課題として以下が挙げられました。①災害時の避難先について「病院に行けばよい」という認識と実際の受入体制との乖離、②個別性を踏まえた支援計画策定の不十分さ、③病院・訪問看護・行政・学校・福祉施設・地域住民等の連携不足と顔の見える関係づくりの必要性、④自助の限界と共助の不十分さ、⑤地域差や職種差による危機意識の違いと現実的に考える機会の不足。さらに今後の課題として、①地域に暮らす医療的ケア児と災害時ニーズの正確な把握、②「病院に行けない場合」を想定した平時からの避難先検討、③行政・医療・福祉・教育・地域住民による連携体制の構築と調整役の明確化、④家族の自助を支える情報提供の充実、⑤実践的な訓練・研修・マニュアル整備、⑥医療的ケア児の生活環境に応じた地域防災体制の整備、が示されました。

終了後のアンケート（回答数22件）では、回答者の半数が病院勤務者で、6割以上が職場の防災担当や発災時支援などの経験を有していました。参加動機は「災害支援の知識を深めたい」「医療的ケア児の支援体制を知りたい」などが多く見られました。また全員が「今後の看護実践に活かせる」と回答し、現場につながる学びの機会となったことがうかがえます。自由記述でも「自施設だけの課題ではないと分かった」「自分にできることから始めたい」などの意見が寄せられ、地域全体で取り組むべき課題だと再認識する機会となりました。

本TSは知識の共有にとどまらず、医療的ケア児を取り残さない支援体制を平時から構築する重要性を再認識し、実践への意欲を高める場となりました。また多職種・多機関連携の必要性を共有し、地域で子どもと家族を支える視点を深めました。国内外で自然災害が頻発する中、当委員会では地区リーダーを中心に評議員・会員ネットワークを活用した被災地の情報収集・提供や関係機関との情報共有体制の構築を進めています。あわせて災害支援活動の助成も行っています。今後も学術集会での議論を重ね、子どもと家族への災害支援につながる活動を継続・発展させていきます。

研究奨励賞受賞者より

● 三重大学医学部附属病院　井倉 千佳

このたびは、論文「子どもをもつ小児がん経験者が妊孕性低下リスクへ抱いた思い」に対し、栄誉ある研究奨励賞を賜り心より感謝申し上げます。このような評価をいただけましたことを、大変光栄に思うと同時に、本研究にご協力くださった皆様への感謝の気持ちを改めて強くしております。

本研究のきっかけは、小児がんの長期フォローアップ外来で小児がん経験者の方たちが医師から妊孕性低下リスクの告知を受けている中、看護は何ができるのか悩んだことからでした。研究では、子どもをもつ小児がん経験者10名の方にお話を伺い、妊孕性低下リスクをどのように受け止め、どのような思いを抱いてきたのかを明らかにしました。妊孕性低下リスクへの思いは、その人の生活状況や発達段階によって変化していました。そして苦悩を抱えたときには、闘病経験や周囲の支えを力にして、自分の人生や命について考え受け止めていることが明らかとなりました。こうした語りから、妊孕性低下リスクへの支援は、医学的な情報提供だけではなく、その人がこれまで歩んできた人生や闘病体験、現在の生活、発達段階、そして支えてくれる存在を含めて理解することが重要であると学びました。妊孕性低下リスクを捉える際に影響していることが、闘病経験や支えてくれる存在であることから、妊孕性低下リスクへの支援は闘病中から始まっていると考えます。看護師は闘病中から、子どもは逃げ出したい治療に懸命に向き合っていることへの労い、病気を克服したことへ自信をもてる声かけなどを積極的に行うこと、妊孕性低下リスクを含めた対話を重ねることなどが求められていると考えました。

加えて、妊孕性について「相談したい」と思っていても、結婚や妊娠の予定がないことへの遠慮や、保護者の前では話しにくいことなどから、相談を諦めてしまう経験も明らかになりました。だからこそ、医療者は本人が必要な時に安心して話せる環境をつくることや保護者とともに告知について話し合うことが大切だと考えました。

また、子どもをもてないことではなく、計画外に子どもをもつことでネガティブな思いが生まれるという特徴的な結果もありました。看護師を含む支援者は、小児がん経験者が妊孕性低下リスクの強弱に関係なく円滑な妊娠を予想外であると困惑するほどリスクを重く受け止めている可能性があることを理解して告知方法や内容、告知後の継続したフォローをし続ける必要があると考えます。

本研究を通して、研究は、これまで十分に言葉にされてこなかった一人ひとりの思いに耳を傾け、その声を次の支援へ繋いでいくことができる可能性があると実感しました。本研究の成果が今後の実践に繋がり、子どもたちへのより良い支援として還元されたらとても嬉しく思います。研究に参加してくださった小児がん経験者の皆様が、大切な経験や思いを語ってくださったからこそ、本研究を形にすることができました。また、研究の過程でご指導・ご支援くださった先生方、査読、論文掲載、選考に関わってくださったすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

今回の受賞を励みに、今後も小児がん経験者の方々が、それぞれの人生を自分らしく歩んでいくことを支えられる看護について考え続け、実践と研究の両面から貢献できるよう精進していきたいと思います。



研究奨励賞授与の様子
（左：井倉 千佳 様、右：宮崎 つた子 様）

「リレートーク」 ● 関森 みゆきさん （武蔵野大学看護学部　教授）

バトンを渡してくださった田中美央さん、ありがとうございます。

自己紹介

長野県松本市に生まれ、看護師の新人時代まで過ごしました。臨床経験は、地元の大学病院の小児科病棟から始まり、新生児看護を深めるため神奈川県内の病院に異動しました。長野県立こども病院の開院時に地元に戻り、新生児看護に勤しみました。その後、縁あって後輩に小児看護学を教えることになりましたが、知識不足を痛感し、聖路加看護大学大学院に進学。そこで出会った先生方に刺激を受け、仲間と切磋琢磨し学びを得ていきました。大学院修了後からは、東京女子医科大学、自治医科大学、そして今は武蔵野大学で看護基礎教育に携わっています。

看護師になったきっかけ

幼いころから、子どもが好きで、親戚の集まりではいとこたちのお世話係でした。将来は子どもに関わる仕事に就ければいいな…程度に思っていましたが、江川晴さんの「小児病棟」がドラマ化された放送を見て、子どもの命を守る看護師の姿に感動し「小児科の看護師になりたい」と思ったのがきっかけです。学生時代も（自分なりには）「小児看護学」には力を入れて講義を受け、実習にも一生懸命に取り組んでいたことを思い出します。

新人時代の思い出

最初から希望通り、小児科病棟に配属となりました。しかし、病棟全看護師14名のうち、4名が新人看護師という大変な状況で、嬉しさよりも責任の重さを感じました。忙しい中での新人教育は本当に大変だったと思いますが、先輩方の厳しくも愛のある指導を受けながら何とか仕事をこなす日々でした。なかでも私にとっての一番の師匠は、入院している子どもたちでした。血液疾患を専門とする教授の元に県内外から来院しており、当時は初発であれば1年以上の入院を余儀なくされていました。私たち新人看護師より、医療器具の使い方や先輩看護師のケア方法を熟知しており、「そんなことも知らないの？」と言ってはこっそり教えてくれました。また、未熟児室では両掌で包み込めるほどの小さな子どもたちが、私のケアの未熟さ・心地悪さを命がけで教えてくれました。どうしたら安全に安楽にケアが提供できるだろうかと悩み考え、創意工夫することの大切さと楽しさに気づく経験となっています。



小児看護の魅力

やはり、子どもたちの「生きる力」と「発展する力」を、間近に感じられることです。小さな体のどこにそんな大きなエネルギーがあるのだろうと思うほどに、生きる力をもっています。その力を守ることが私たちの役割だと思います。また、目に見えて成長・発達を遂げていく力は、私たちに力も与えてくれます。また、子どもを支えている家族にも、それぞれに発展する力があります。子どもたちが社会の一員として、安心して生活できる環境を整えていくことが、常に求められますね。

ストレス解消法

甘いものに目がありません。和洋どちらでも、おいしいスウィーツを食べることです。コレステロールなんて気にしません。それから、最近は映画館の大きなスクリーンで映画を見ることも加わりました。少し時期を外して、前後左右に人がいない環境で静かに見ています。

後輩たちに期待すること

私たちは1人では生きていけません。出生数の減少と共に人口減少も始まり、これからは社会の構造や仕組みも変化していくと思います。もちろん医療や福祉の体制等も変化していくでしょう。ますます、人と人との繋がり、関係が重要になってくると思います。患者さんとそのご家族はもちろんですが、自分の周囲にいる人への関心を持ち続けて欲しいと思います。

バトンを受けて欲しい人

大学院の同級生であり、修了後も折に触れ気遣い励ましてくれる西田みゆきさん

第37回学術集会のご案内

日本小児看護学会第37回学術集会

テーマ：Journey ― ともに歩む ―
会　期：2027年8月7日（土）～8月8日（日）

● 第37回学術集会長　江本　リナ



このたび、「Journey ― **ともに歩む** ―」をテーマに、一般社団法人日本小児看護学会第37回学術集会をパシフィコ横浜にて開催することとなりました。

こどもと家族は、地域という暮らしの場の中で日々を営み、成長・発達していきます。そして、その暮らしを支える看護は、病院だけではなく、地域、学校、こども園、保育園、福祉施設など、こどもと家族が生活するさまざまな場所にあります。

「小児専門病院ではないから」「小児領域に携わり始めたばかりだから」「地域や福祉の場で活動しているから」――そのような理由から、自分の実践を「小児看護」と呼ぶことに戸惑うこともあるかもしれません。

けれども、**こどもと家族の暮らしのそばにある看護は、すべて小児看護につながっています。**

■多様な視点から、こどもと家族を考える

今回の学術集会では、さまざまな領域で活躍されている方々をお招きし、これまでの実践を礎に、こども・家族・支援者それぞれの歩みを見つめながら、これからのこどもと家族への支援について皆様とともに考えてまいります。

(1) 講演

3つの講演を企画しています。

福音館書店の絵本編集者である松村美玖氏には、幼いこどもに向けた絵本づくりにおいて大切にされていることについてお話しいただきます。絵本という身近な文化を通して、こどもの世界や、こどもと家族の生活への理解を深める機会となることを願っています。

ジャパンハートの医師である嘉数真理子氏には、国際医療支援の現場から見た世界のこどもと医療についてお話しいただきます。さまざまな環境で暮らすこどもたちと医療について知り、グローバルな視点からこどもへの支援を考えます。

フランスの子ども家庭福祉に造詣が深い安發明子氏には、フランスの子育てやこどもの自己決定を支える幼少期からの教育を中心にお話しいただきます。日本のこどもと家族を取り巻く環境を見つめ直し、こどもが自らの人生を歩むことを支えるために何ができるのかを考える機会としたいと思います。

(2) シンポジウム

現代社会において、こどもたちを取り巻く重要なテーマを取り上げ、多様な立場の方々とともに考える機会を企画しています。

1つ目は、**こどものこころ**に焦点を当てます。精神科医、当事者、福祉・教育の立場にある方々から、思春期のこどもたちのこころや生きづらさをどのように捉え、どのように寄り添うことができるのかを考えます。

2つ目は、ICT／AIに焦点を当てます。ゲームやネット空間、教育環境など、こどもたちの身近なものとなったICTやAIについて、児童精神科医、教育者など、多様な専門家とともに考えます。

■こどもと家族を支える実践

小児看護は、特定の場所や専門領域だけに存在するものではありません。そして、こどもと家族を支えているのは、看護だけでもありません。

こどもと家族がいるところに看護があり、さまざまな立場の支援者がいます。

それぞれの場所で、こどもと家族のそばに寄り添い、ともに歩んできた実践があります。

本学術集会が、そうしたさまざまな実践を持ち寄り、互いの経験や思いを分かち合いながら、「これも、こどもと家族を支える実践なのだ」と新たな気づきを得られる場となればと願っています。

Journey ― **ともに歩む** ―、これまで歩んできた道を振り返り、今を見つめ、そしてこれからの小児看護をともに考えてまいります。

皆様とパシフィコ横浜でお会いできますことを、企画者一同、心より楽しみにしております。



一般社団法人日本小児看護学会では、会員様にメールマガジンをお届けしております。学会や研修会のお知らせや、助成金の公募案内など最新情報を配信しております。

ご登録されていない方は、是非下記URLもしくはQRコードより「メールマガジンの配信登録」をお願いいたします。

https://jschn.or.jp/email-magazine/

広報委員会メンバー

● 委員長：渡邊輝子　● 委員：新家一輝、西垣佳織、田中美央、鈴木千琴（第66号編集長）